

真夏の日差しに照らされる都会の交差点で、それが目に飛び込んで来たとき、思わず足を止めた。

完璧な造形と色彩。

まさしく理想だと、自分の理想が分かっているのに、理解できた。それほど何かが自分の中で、パズルのピースのようになんか嵌ったのだ。

「きれい」

口から零れた言葉はそれだけだった。そしてその言葉を合図にきれいなものを自分の箱に収める。

もう一度それを自分の目で見た。

こんなにも胸を焦がすような体験は、このときが初めてだった。そして、もう二度と得られるものではない気がした。

1 変化

最近、常連客が一人増えた。

ある街の一角に存在するカフェ、マシエリ。こぢんまりとして、懐かしい雰囲気のあるカフェではあるが、手作りのスイーツがとても美味しく、若い人にも人気のあるお店だ。

私は大学に通う傍ら、二か月前前からこのカフェでバイト

している。

それ以前は大手チェーンのスーパーで大学一年生から約二年間働いていたが、改装工事を行うことになり、それを機に辞めた。そして次のバイト先を探しているときに、マシエリの求人を見つけ、働くことにしたのだ。

バイトのシフトには週に三回入っており、最初は仕事内容を覚えることに必死だったが、段々慣れてくるとマシエリをよく利用する常連客の顔ぶれを認識できるようになった。

私は月曜日と木曜日の朝から昼前までと土曜日の夕方から夜にかけて、シフトが固定されている。

土曜日は休日だから客が平日に比べ多く、入れ替わりが激しいためまだ誰が常連客なのか、分からない。

一方で平日の朝はとても分かりやすい。コーヒーを飲み、もしくは朝食を食べにくるサラリーマンやOL、近所の老人がいつも同じ時間に来て、店内で過ごしていく。

だから二週間前からその時間に急によく見るようになった顔は印象に強い。

チリン、とお客さんが来店した合図が耳に届いた。

私はテーブルを拭いていた手を止めて入口に顔を向ける。

入って来たのはすらっとした長身に、サングラスをかけた状態でも分かる、整った顔立ちをした若い男性だった。

最近よく来る、常連客その人だ。

「いらつしやいませ」

静かな店内に合わせて、声の大きさ、調子を共に抑えて挨拶する。

すると男性がすつとサングラスを外して、少し目元を緩めた。その目と目が合うが、私はすぐに視線を外して、口元を見た。変わらずピンクベージュだ。

落胆する気持ちを抱えつつ、その口端がびくりと動くのに気付き、私は口を開いた。

「奥の席ですよ、空いていますよ」

そうすると男性は驚いたように目を少し見開いた。だがすぐにふつと笑う。

「ありがとうございます」

耳心地の良い爽やかな声が鼓膜に響く。私はどうぞ、と彼がいつも座る席へ案内をした。カウンター席や多くのお客さんが座るテーブル席の間を通り過ぎ、店の奥へと向かう。そしてカウンター席の終わりと共にテーブル席側に存在する仕切りのすぐ隣の席で足を止めた。仕切りはあまり高くないが、席に座ったら顔はかるうじて見える程度で、手元は一切見えない。

ソファ席に座った男性の前にメニューを並べる。けれど私にはそれが必要のないことだと分かっていた。

「ご注文は？」

「朝のサンドイッチセットで、飲み物はエスプレッソ・コンパナで」

「かしこまりました」

いつものセットだと思いながら、私は短く応えて厨房の方へと向かった。

「明人さん、サンドイッチセットを一つお願いします」

「了解です」

顔を覗かせながら注文を伝えると、厨房に立っている清潔感のある短髪に、鼻下に髭を生やした男性がにこりと笑って、返事をした。

マシエリのオーナーである鷹崎明人さんだ。

マシエリは明人さんが一人で経営し始めたカフェだ。先程注文のあったサンドイッチセットなどのメニューは全て明人さんが考案し、切り盛りしている。

「ねね、ゆちちゃん」

ふと小声で話しかけられ、私は振り返った。たまに木曜日の朝の時間でシフトが一緒になる中村さんが少し頬を染め、目をきらきらと輝かせながら私を見つめていた。

一つ上の中村さんはここに勤めて四年目になり、バイト先の先輩としては学ぶべき点が多くある。

けれど私は時々中村さんのことを年上に思えないことがあった。

中村さんは肩にかかったゆるりと巻いた茶髪を揺らしながら、もう一步私に近付いて、そのきらきらとした目で私を見上げた。

「さっき案内していた男性って、モデルの 柗透君（びょうしゅう）じゃない!?」

ああ、これだ、と私は思った。中村さんは身長が低いから、女性にしては身長がやや高めの私と会話をするときには自然に彼女が私を見上げる形になるのだ。距離が近いと余計に

加えて中村さんはとてもかわいらしい顔をしている。くりっとした目、小さな唇。そしてそのかわいさを際立たせる、ピンクを基調としたメイク。特に綺麗なコーラルピンクのリップはよりその唇の小ささを強調している。

私に女性へのそう（ひび）いう気はないが、とても庇護欲（ひご）をそそる造形をしていると思う。

かわいいなあと思いつつ、あくまでも先輩である彼女に答えた。

「ああ、言われてみればそうですね」

「言われてみればって！ 雪ちゃんはモデルさんとか興味ないの?」

「あまり。あのお客さんのことも看板とかで見た顔と似てるなあとは思いましたけど」

「初めて男の人として化粧品（けしょう品）の広告に起用されたって去年話題になっていたの、知らない?」

「あんまりそういう話題は気にしたことがないので……」

私がそう答えると、中村さんはえー、と残念そうな声を出した。何が彼女にとつて残念なのか私には分からなかったが、こうして話している間にも、そのお客さんの方をちらちらと見る中村さんを見て、気が付いた。

「もしかして中村さん、その、柗透さんのことが好きなんですか?」

「えっ!?!」

少し大きな声を出してしまった中村さんは、店内にいるお客さんに向かって頭を下げる。そして私の横にびたりとくっついて、初めに話しかけて来たときよりも小さな声で言った。

「わ、分かる?」

「まあ何回もあのお客さんを見ているのを見てたら」

「やっぱり分かっちゃうよね」

はあと中村さんは小さく溜息を吐いて、頬を両手で押さえた。その様子はまるで恋する乙女だ。

私は彼女に分からないように口角に上げた。

それから私はキッチンの人明人さんがもう少しでサンドイッチを完成させることを確認し、エスプレッソマシーンにカップを置いて電源を入れる。

「あのね、透君は今一番私が推してるモデルさんなの」

「とても好きなんです、その人のこと」

「うん！ 雑誌の写真の雰囲気とね、インタビューのときの雰囲気ギャップが凄くて、もうね……たまらないの。私の周りの女の子で好きじゃない子がいないくらい、今凄いい人でね」

「そんなに凄いい人なんですか？」

「うん！ 今度私を持つている雑誌持ってくるね！ きつとね、雪ちゃんも好きになると思うの」

再びきらきらとした目で見つめられる。

かわいいなと思いつつ、このときばかりは少し口角が引き攣った。けれど中村さんの気を悪くしたくない気持ちもある。だから私は楽しみにして、とだけ返した。すると彼女は嬉しそうに笑った。

マシーンが止まり、エスプレッソが淹れ終わったのを見て、カップを取り出した。そしてその上にホイップクリームをくるくるとのせていく。

明人さんが持ってきたサンドイッチのお皿とカップを一緒

にお盆にのせ、そこでふと思いついた。

「中村さん、セット、持っていくますか？」

「えっ」

私の言葉に心底驚いたように目を大きく見開く。ついで大きく首を横に何度も振った。

「わ、私は遠くから見てるだけで充分だからっ」

「そうですか」

ここで更に勧めるようなことをしても再び首を振る気がし、私は短く応えた。

お盆を持つて、お客さんの元へと向かう。

モデルをやっているらしいそのお客さんは、確かに顔が遠目で見ても分かるぐらい整っている。目、鼻、口それぞれの形や顔の上での配置、お互いの距離の比率。確かにこれは中村さんのような若い女性が熱中するのも無理はないだろう、と思った。とても魅力的な造形をしていると思う。

「お待たせ致しました。朝のサンドイッチセットです」

タブレットの画面を熱心に見ていた彼は、私が声をかけるまで気付いていなかったようだった。タブレットをソファ席に座る自分の太腿近くに置き、私の方を見た。

「ありがとうございます」

そう言いながら微笑んだ。私はごゆっくりどうぞ、と返し

て、少し頭を下げカウンターに戻った。

「さ、さつき微笑んでたよね……？」

先程のやり取りをずっと見ていたららしい中村さんに恐る恐る聞かれ、肯定する。すると再び溜息を吐いた彼女は、私を尊敬のこもったまなざしで見つめた。

「雪ちゃんは凄いな……あの笑みがもし私に向けられたら、私、死んじゃう」

「それは……」

大袈裟じゃ、と続けようとしたやめた。中村さんならありえない話でもないと思えたからだ。

「雪ちゃんはあの顔であの笑みに向けられても何とも思わないの？」

「ええ、まあ」

「凄いなあ……」

感心するように呟く中村さんに私は苦笑いを浮かべた。

丁度そのとき勘定をするサラリーマンの男性客に呼ばれ、中村さんはレジに、私はその男性客のテーブルに片付けに行くことで会話が終わった。

テーブルを片付けながら、店奥に座る例のお客さんを一瞥する。

改めて見ても彼は整った顔をしている。若い女性が熱中す

るのも無理はないと分かる。

けれど私にとっては何か足りない。そう感じていた。

その週の日曜日に私はいつも通り一眼レフカメラを持って、街に出かけた。

私の趣味は写真だ。特に私は見る方ではなく、撮る方に特化しているタイプだった。

確かに現像はする。けれどそれを後から振り返って見る、というようなことは一切したことがなく、現像した写真もアルバムに綴じるでもなく無造作に一つにまとめていた。

だから大学にあるという写真部には入部しなかった。私は誰かの写真を見ることにも、誰かに私の写真を見られることにも興味がなかったのだ。

バイトも大学もない私の休日、つまり毎週日曜日に私は一眼レフを手を外に出る。その一眼レフは少し古びているが、買い替えようとは今まで一度も思ったことがない。

何故ならこの一眼レフは父の遺品だからだ。父はこの一眼レフを病に侵されながらも最期まで使っていた。

『自分が綺麗だ、美しいと思ったものを自然にフィルムに入れるのが一番いいんだ』

父に何故その瞬間に写真を撮るのか聞いて、返ってきた言

葉だ。その頃はまだ父も元気で、よく外に出かけていた。

この言葉は私の写真を撮る方向性を決定付けたもので、今でもそれは変わらない。

あてもなく外に出て、電車に揺られる。そして車内から見える街の景色を眺めて、自分の目を引いたものがあれば、その駅に降り立つのだ。そしてカメラのシャッターを切る。

被写体になるものは、要は私の感覚のみで選ばれるのだから、傍から見れば乱雑だ。撮り方も技術も何もあつたもんじやない。

けれど私はそれで満足していた。自分の撮りたいものを撮る。それだけで私は幸せだ。

でも最近少し、その感情に変化があつた。

その場、その瞬間に撮るということに満足していたはずなのに、家に帰つてくるとその満足感がなくなるのだ。

そして今まで一度もやったことのなかった、過去に撮った写真のある一枚を引っ張り出してひたすら眺める、ということをしてしまう。

その写真には、最近マシエリの常連客となつた、柗透の姿が写っている。

2 枯渴

翌週の木曜日、中村さんは宣言通り柗透が載っているという雑誌を貸してくれた。

ちなみにその日も彼は来ていて、本格的に常連客になりつつある。彼は月曜日の朝にも来ているから、もしかしたら毎日来ているのかもしれないと思ひ始めた。それを中村さんに伝えると、朝のシフトを木曜日は勿論、他の曜日も増やそうか真剣に悩んでいて、その姿もかわいかった。

バイトを終え大学に行つて、家に帰ってくる頃にはすっかり中村さんから貸してもらつた雑誌のことは忘れていた。けれど夕食を食べて、お風呂に入った後に次の日の準備をしているときに、ようやくその存在を思い出した。

袋に入れられた雑誌を取り出すと、早速表紙に柗透が写っていた。カフェのときの雰囲気とは違い、鋭い視線をこちらに向けている。

表紙の題目を見るとどうやら彼の特集が組まれているようだった。『人気急上昇中！ 女性も男性も魅了するモデル、柗透の素顔とは！？』と書いてある。

ペラペラと捲ると、雑誌の真ん中のページあたりにその特集が載っていた。

初めに様々な服を着た彼が、その後五ページほどのインタ

ビューと共に写真が載っていた。

一通り目を通して、なるほど、と理解した。中村さんの言う通り、カメラに向ける顔と普段の様子にはギャップがある。カフェで受けた印象とインタビュアーに対して答えている印象は大して変わらなかった。ふんわりとした雰囲気で、優しい感じだ。それに加えてインタビュアーの内容から天然っぽい所があるようにも思えた。純粹に可愛らしいと思う。

けれどカメラに向ける顔は全く違った。鋭い視線や物憂げな表情、女性を魅了する流し目。そこにインタビュアーから受ける可愛らしさはなく、男らしい力強さを感じさせる表情を見せたかと思えば、胸をぎゅつと締め付けられるほど儂さを感ずる姿を見せる。

まさしく七変化だ。

柊透の特集ページを見終わり、私は雑誌を閉じた。

「はあ……」

思わず零れた溜息は、中村さんのものとはまるで違った。

口がカラカラで、変な動悸もしている。

冷蔵庫からお茶を取り出して、コップに注ぐ。そしてそのコップを叩いで一気にお茶を流し込んだ。

「足りない」

零れた言葉は一週間前よりも渴望の色がはっきりと含まれ

ている気がした。

一週間の中で最も大好きな日曜日が来た。

今日も私は一眼レフを持って外に出る。

その時点で私の心は満足させてもらえないものに飢えていた。この渴望は日に日に酷くなっている。

今日こそは彼を超えるものを。そう願って琴線に触れるものを撮っていく。けれどやはり超えるものは出てこない。

それでもそれなりの満足感を得て、家に帰って来たとき、突然虚無感が私を襲った。冷気のようにじわじわと侵食してくるそれは、それまであった満足感を消していく。

私は咄嗟にテーブルの上に置かれたアルバムを開いた。早く早くとページをパラパラと捲っていく。

そして、アルバムページ分の大きさに印刷された柊透の顔が映る。

すると嘘のように冷気は退いていった。けれど完全にはなくなってくれない。

私は下唇を噛みながら、暫くその場に居座り続けたが、根負けしてアルバムをばたんと閉じた。

ふうと息を吐いて、右手の人差し指を下唇に添えると、乾いた感触の他にぬるつとした水分が指にまとわりついた。見

れば、真つ赤な鮮血だった。
ぺろりと私は下唇を舐めた。

今日も朝早くからマシエリに柵透は来ていた。

このお店のお客さんになってから三か月ぐらいが経っている。
最近になって近所に住んでいるという常連客のおじいさんが、彼に挨拶をするようになった。私の中ではそれが完全に常連客となった合図だ。

相変わらず中村さんは彼が来る度に緊張していて、未だに彼に対して接客ができていない。慣れると思っていた私はその姿に若干うんざりしている部分もあったが、かわいいから良しとすればいい、とも考えていた。

今日は月曜日の朝で心なしかカフェに来ている社会人の方々は憂鬱な表情を浮かべているような気がする。けれどそれとは対照的に、にこやかな表情を浮かべているのは柵透だ。

料理と飲み物を彼のテーブルに置く。朝のサンドイッチセツトに、真夏の暑い日というのにエスプレッソ・コンパナといういつもの注文だった。

「お待たせ致しました」

「ありがとうございます」

「お客様」

するりと私から出た言葉に、彼は不思議そうに見上げた。
「とても嬉しそうに見えるのですが、何か良いことでもあったのですか？」

自分でも驚くぐらい自然な声で質問が出た。これぐらいの会話は忙しくない限り常連の方としていたから、彼にとっても不自然ではないはず。その証拠に少し目を見開いた後、とろりと目を緩ませた。

「久しぶりの休みに大好きな人とこれから出かけるので」

とても幸せそうに言う彼は、その瞳の奥に隠しきれない甘さがあることに気付いていないようだ。私は心の中なるほど、と呟きつつ、愛想よく笑った。

「それは喜ばしいことですね。良い一日を」

「あなたも」

私は礼を述べつつ頭を下げ、カウンターに戻る。

これは一切合切中村さんに対して話せる内容ではないな、
と思いつつながら。

同じ週の木曜日、例のごとく柵透はお店に来ていたが、あまり元気がないように思えた。体調不良というよりも落ち込んでいようだと、私は考えた。

「透君、元気なさそうだね」

心配そうに彼を見つめる中村さんが小さく呟いた。確かにそうですね、と返すと、より不安げに中村さんは彼を見つめる。

少し胸がむかむかする気がして、思わずいい加減なことを口にしていた。

「きっと眠いんじゃないですか」

けれどこの口から出まかせな言葉を中村さんは、そうかなあと言いつつも自分の中での折り合いを付けるのに使ったようだった。

「うん、そうかもしれないね」

そう言って微笑んだ中村さんを見て、すっとむかむかが取れる。

ああ、いつものかわいい中村さんだ。

何度もその姿を見ているが、来週は実家に帰るため特に目に焼き付けようと私は微笑み返した。するとまた嬉しそうに彼女は笑うのだ。

結局、彼が何故落ち込んでいたのか、私には分からないし、分かる訳がなかった。プラスのことは他人から聞かれても気を悪くしないが、マイナスなことは誰もが無遠慮に聞かれれば気を悪くするだろう。

それに聞く手段すらもなくなったのだから、気にすることもなくなった。

彼はその日を最後にマシエリに姿を現さなくなったのだ。

ミンミンとなく蝉の鳴き声が周りの音をかき消すほど、辺りに響いている。

駅舎から出た私は差し込んでくる日差しに目を細めた。

お盆の時期とは少しずれた、八月末に私は実家のある群馬県に来ていた。この辺りは自然に囲まれており、普段いる都会に比べたら、人工的な騒音は少なく、その分自然の音が耳に強く届く。そのせいか、蝉の鳴き声がより一層煩く思えた。

手に持っているバッグは一般的な帰省にしてはとても小さい。それもそのはずだった。私は実家に一泊だけしに来ただから。

私はLINEを開いた。そして母親とのトーク画面を表示させる。私が三日前に母親に対して送った、『二十八日にそっちに行く』という言葉が最後に終わっていた。そこには既読がついているが、返信は未だにない。

やつぱりと思いながら、私は近くのバス停まで歩いていく。

私は母親が嫌いだ。そして母親も私のことが嫌いだ。いや、嫌いというよりも無関心で、関心があったとしても邪魔だと

しか考えていないようだった。

父と母はまるで真逆だった。どうして二人が結婚したのか、私には分からない。

父は写真家で、写真をこよなく愛し、自然がとでも大好きだった。だからよく山を登ったり、キャンプに行ったりして、そこで写真を撮り、私はそれについて行ったものだ。それにお金にルーズだった。私は当時知らなかったが写真家としてそれなりに有名だったらしく、収入は安定してあったようだが、でもそれを贅沢ぜいたくに使ったりしている様子はなかった。

一方で母は若干浪費癖があるようだ。ブランド物の服やバッグを買っては派手に着飾っていた。山や海と言った自然の多い場所は嫌いで、都市の観光地に行くとき以外に母が父の写真旅行に一緒に行くことはなく、都市観光地にすら数えるほどしか同行しなかった。どうやら仕事をしていたようだったけれど、不自然に家を空けることが多くて、私の推測でしかないが恐らく浮気をしていた。

そんな母を父は一途に愛していた、亡くなるその瞬間まで。娘の私ですら哀れに見えるぐらい、父は母の浮気を疑うこともなく、呑気に最期まで笑っていた。

私はそんな父に何も言えなかった。もうすぐ亡くなるって人に、絶望を突き付けることができるほど非情な人間にはなれなかった。

エンジン音が聞こえてきて、顔を向ける。バスが停留所で止まり、私は乗車して適当に椅子に座った。平日の夕方近くで学生が少し目立つが、疎まばらな数だった。

静かな車内で窓から景色をぼーっと眺める。この景色はいつ来ても変わらない。目に優しい緑色が視界に多く映り込む。けれど目的地に到着すると、それは灰色が多くなるのだ。つまりそこは墓地だ。

バスを降り、近くの花屋でお供え用の花を買い、父の墓石の場所まで歩いていく。お盆を過ぎているからか、敷地内には誰もいなかった。

「久しぶり、お父さん」

一人、呟く。返ってくる声はないけれど、それでも私は満足する。

花を添えようとして、花立にまだ真新しいものが刺さっていることに気付いた。親戚が最近来たのだろうと結論付けて、屈んで自分の花を空いている左の花立に刺した。そして、自前の線香を上げる。

線香から上がる煙を暫しばらくくぼーっと見つめていたが、ふと口を開く。

「お父さん、私、分からなかったの」

そう言いながら思い出したのは、父の体がまだ元気で写真

を撮りに頻繁に外へ出かける中で、私が小学生のときに珍しく母も一緒に京都に旅行に行ったときのことだった。京都の街並みを歩いているとき、両親の間に会話はなく、父はただ写真を撮るだけ。けれどそのレンズが向かう先は母がほとんどだったのだ。当時父が母を撮るのを見たことがなかったのは、純粹に疑問に思っただけだ。

『どうしてお母さんばかり撮るの？』と。

それに対して返ってきた答えは、あの言葉だった。

『自分が綺麗だ、美しいと思ったものを自然にフィルムに入れるのが一番いいんだ』

照れたように、嬉しそうに言う父の姿は幸せそうだった。

私はそれに対して、母が美人だから？ と聞くと、違うよ、と父は静かに答える。そしてシャッターをまた切るのだ。

そのときの私は母のことが大好きだから、そう言っているのだと思っていた。けれど時が経つにつれ、母に対して嫌悪感を募らせていくと、父の言っていることが分からなくなっていく。もつと言うならば、何故母のことを綺麗だ、と言ったのが分からなかった。

母は良い意味でも悪い意味でも、昔から何も変わっていない。つまり内面も変わっていないわけで、病に侵され弱っていく父のことを献身的に支えたとは言えず、父が自宅療養と

なっても家を空けることが多かった。

そんな人間を綺麗だ、とは言えないだろう。少なくとも私には父の感性が、到底理解できなかった。

「でも去年の夏、お父さんのお墓参りの後に、出会ったんだ」
父の感性が理解できないまま、自然物や無機物で、きれいで、うつくしい、と思ったものを撮っていて、人は一切撮ってこなかった。

けれど、去年の夏にいつも通り外に出かけたときに、私は見つけてしまった。ある交差点を渡ろうと歩いているときに、ビルの屋上に飾られた一つの広告看板を。そこに大きく映っていた、私の理想の顔、その上に鮮やかに色づく色彩。そこには装飾の施された銀色のケースから芯を出し、口元に寄せた格調の姿があった。彼をモデルに起用した口紅の広告だ。

「そのとき、思ったよ。きれいな人を写すときに、その人の中身なんて関係ないって」

格調なんて人知らなかった。正確に言うなら、顔と名前が一致していなかった。けれど私にとっては名前なんてどうでもいい。

「出会ったけれど、私にとってはその瞬間だけだったみたい。お父さんみたいに他の瞬間に、きれいを求めることはできなかった」

ここ数か月マシエリに来ていた柊透を思い浮かべながら、私は眉を寄せた。確かに顔は理想だ、私にとつての完璧がいつも目の前にある。けれど、足りないのだ。あの、形の良い唇を彩る、アブリコットが。

「……はあ。こんなこと言っても仕方がないよね。彼はもうお店には来ない」

私はもう一度ふう、と息を吐いた。

「またね、お父さん」

一方的な会話を終わらせて、私は父の墓石に背を向けた。綺麗な橙色だいだいいろの日差しが、足元を照らしていた。

実家に着く頃には、太陽は沈んでいたが、それはわざとだった。

『長瀬』という表札を見て、一瞬ほっとする自分に若干嫌悪感を抱きつつ、玄関扉の方に歩いていく。鍵を出して、ドアを開けようとしたら、その前にガチャリと音を立てて、中から押される形で開く。

そして出てきた人物を見て、私は思わず後退あしずきした。

「あっくんばんは」

三十代ぐらいの、髪を短髪に揃え、爽やかな印象を与えるその男性は近所の人に挨拶するかのようによく言う。それに

対して私があからさまに顔を顰しかめていることを無視し、その人は、またね、雪ちゃん、と言って、去っていった。

振り返ることも、前に歩くこともできないままでいると、再びドアが開いた。

「……来てたの」

黒いストレートの髪をゆらりと揺らしながら、真っ赤な口紅をのせた唇ににこりとも笑みを浮かべずに母が言う。

「……うん」

「入るなら入って」

母はそう言ったきり、家の中へと戻った。ボタンと音を立てて扉が閉まる。数秒経ってから私はようやくその取っ手を掴つかんだ。

家の中に入ると、案外一年前に来たときと変わらない様子で少しほっとした。きつと母の自室には洋服やら何やらが増えていのだろが、私の目に触れないのだから関係ない。

母がいるリビングを通り過ぎ、二階の自室に向かおうとしたとき、雪、と声をかけられた。私は呼び止められたからではなく、驚きで足を止めた。

母に名前を呼ばれるのなんて、久しぶりだったのだ。

「夕飯は？」

「……食べてきた、いつも通り」

聞かれた問いに答える。何故母がそんなことを聞くのか分からなかった。大学に入学して東京に行つてから、年に一回実家に帰つてきているが、家で食事をとつたことがない。母とも必要最低限の言葉以外を交わすことなんてなかった。

「雪、こつちに来て」

有無を言わせない強い口調で言われ、私はリビングに入り、椅子に座る母とテーブルを挟んで着席する。

そんな口調で言つたのに、母はどこか不安げだった。

「……大事な話があるの」

「何」

間髪容れず聞き返すと、母は下唇を噛んだ。ふつくらとした赤い唇が半分隠れる。けれど暫くして、能面のように無表情となった。

「私、再婚しようと思うの」

息を呑みそうになり、既すでにの所で止める。ここで動揺を見せたら負けのような気がしたのだ。けれど続いた言葉に私は今度こそ息を呑んだ。

「……それで、この家を売ろうと思うの」

再婚なんて、この際どうでもいい。そんなのは母の勝手だ。

けれどこの家を売るということは――

「――の」

「雪？ 何て言つたの？」

「お父さんと捨てる気なの？」

自分でもびっくりするぐらい低い声が出て、母も驚いた様子だった。すっかり能面は剥はがれている。

「そ、そんなつもりはないわ。お父さんのことは今でも大切に」

「嘘。お父さんが生きていたときからあなたはいつでも良かったんでしょ」

一息に言つて、私は立ち上がった。そして母の顔を見ずに背を向けた。

「……私は家を売ること、反対だから」

そう吐き捨てて、私はリビングを出た。

翌日、私は母とは一切会わずに早朝、家を出た。

3 再来

母に対してはああ言つたが、結局私は一年に一回しかあの家に戻らないのだから、知らない間に家が売られていてもそもそも気付くことができない。

だからある意味賭けだった。母がどうするのか、連絡を取

るつもりはない。だから本当に家を買ったのかどうか分からないのは、来年の夏だ。

家売ろうと思っていることを私に話すということは、何も言わずに売るよりは母から歩み寄られているのだと、東京の下宿先に到着して、冷静になってから気付いたのだ。

残暑も通り過ぎて、過ごしやすい秋の季節になった頃、土曜のシフトの時間に中村さんが加わった。

就職活動が終わったことと、土曜日に入っていたバイトの一人が辞めたことが重なって、彼女が入るようになったのだ。

佟透がお店に来なくなった当初、彼女は若干気にしていたようだったが、すぐに彼が来る前の彼女に戻った。更に、もっとお気に入りのお店を見つけたのかもね、と笑っていたのだ。

私としては中村さんが落ち込まなくて良かったと思っていた。中村さんの落ち込む姿を見てしまったら、私も冷静でいることが難しくなるかもしれない、と考えていたからだ。

彼がお店に来る度に、またあの広告のように私の理想にぴったりと当てはまるような瞬間が来るんじゃないかと期待して、求めて、でも結局その瞬間は得られない。

いつまで経っても喉の渇きが潤わないような辛さはもう味わいたくなかった。

「雪ちゃん、おはようございます」

お皿を洗っていると、後ろから中村さんの声がした。私は挨拶を返そうと振り返るが、彼女の姿を見たときにその言葉は出てこなくなった。

中村さんは相変わらずかわいい。それは変わらない事実だ。けれど今日の前にいる彼女は、少し違う。

その唇を彩っていたのは赤色だった。

「……雪ちゃん？」

何も言わない私を中村さんが心配そうに覗き込む。その姿が目に入り、私ははっと我に返った。

「あ、すみません……おはようございます、中村さん」

「大丈夫？ もしかして体調悪い？」

「あ、いえ……そうではなく……」

ちらちらとどうしても彼女の唇に目が行く。

赤色の口紅はどうにも苦手だ。母を否が応でも思い出してしまうから。

しかしそれを今着けているのが、中村さんというのが私に複雑な感情を抱かせた。

「あの、中村さん」

「うん？ 何？」

「その、真っ赤な口紅は……どうされたんですか？」

少し迷って出てきた質問はそんな言葉だった。変なことを聞いてしまった気がしたが、今の私にとって他に言いようがなかった。

「これ？」

「あ、はい……あまり中村さんが赤色を着けているのを見たことがなかったので」

人差し指を口元に持ってきて首を傾げる彼女の姿に、かわいい、という感情が沸き起こる。一方でやはりそこに違和感が混じっていた。

「これはね、彼氏から記念日に貰ったの。あんまり着けたことのない色だから似合ってるかどうか分からないけど……」

自信なさげに言うが、その表情には嬉しさが滲^じんでいる。

似合ってない、と心の内では叫んでいた。けれどそんなことを彼女には言えない。

同時に私は嘘を吐けなかった。

「似合ってるかどうかは正直分からないですけど……私はコーラルピンクの口紅を着けた中村さんが好きです」

「あ、そうなの？　じゃあ雪ちゃんと一緒にときはピンクの口紅を着けてくるね」

私の返答に気を悪くするでもなく、彼女は嬉しそうに笑った。そしてホールに出て行く。

彼女の反応に呆気に取られつつも、どこか救われたような気がした。

「ありがとうございました」

店内に残る最後のお客さんが勘定し、私は礼を述べつつ頭を下げた。チリン、という扉の鈴の音を最後に店内ががらんと寂^{さび}しくなる。もうすぐ二十時であるため、閉店準備にとりかかる。

「中村さん、私は洗い物をします」

「分かった、じゃあ床掃除しておくね」

中村さんはそう言うと、用具入れに取りに行った。

私は最後のお客さんがいたテーブルの上を片付け、洗い物を行う。そして最後に翌朝気持ちよくお客さんを迎えられるように、テーブルを拭き、その上を整理していた、そのとき、チリンと扉が開く音がした。

鍵をかけておくのを忘れていたことに、しまったと思いつつ、私は口を開いた。

「お客様、申し訳ございません。本日のラストオーダーは……」

締め切らせていただいています、と続けようとして、言葉が詰まった。驚きのあまり、数秒テーブルを拭いていた姿勢

で固まってしまふ。店の奥で床を掃いていた中村さんの、えつという声が聞こえた気がした。

入口に終透が立っていたのだ。

しかし私が身を固まらせてまで驚いたのは、それだけが理由ではなかった。

その顔に誤魔化しのきかない腫れた頬と、少し切れた口端があつたのだ。

「ごめんなさい、エスプレッソ・コンパナだけでも飲ませてください」

あ、いつも飲んでいたやつだ、と思ひ出す。約二か月振りに聞く彼の声は、相変わらず耳心地が良かった。けれど彼の表情は以前のような微笑みではなく、まるで何かを懇願しているかのような必死な表情だった。

何かってエスプレッソ・コンパナ？ と少し不思議な疑問を持ちつつ、私は彼の下へと近付いた。

本来では今の時間にオーダーを受け入れることはできない。一時間前に帰った明人さんには、残業はしないように言われていた。そのためにお客さんの来店やオーダーを調整する。

けれど彼の表情を見てしまったら、それを無視することはできなかった。

「かしこまりました。いつもの席でよろしいですか？」

私がそう答えると、彼は少しほっとしたようだった。頷くのを確認して、私は以前いつも座っていた席へと案内した。そしてエスプレッソ・コンパナを作る前に、中村さんはどこにいるのかと店内を見渡した。先程は店奥、つまり彼が座る場所に近い所にいたはずだったが、案内をしたときにはいなかったのだ。

カウンターに入ると、キッチンの入口に唾然とした様子で立っている彼女の姿があつた。

「あの、中村さん。エスプレッソ・コンパナだけでも提供していいですか？」

「え、あ、うん……」

ぼーっとした様子でただ頭を縦に振る。突然彼がお店に来た衝撃にあまり上手く反応ができていない様子だった。

とりあえず接客が先だと考え、私はキッチンの方に行き、保冷剤、雑巾用の未使用のタオル、消毒液とティッシュを持って彼のテーブルまで戻った。

「もし良かったらお使いください」

持ってきたものを彼に渡すと、彼はこの日初めてふわりと笑った。

「ありがとうございます」

何度か聞いたことのあるフレーズで、何度か見たことのあ

る場面であるはずなのに、私はあれ？　と思った。けれどその場ではそのことについて深くは考えずに、頭を下げてエスプレッソ・コンパナを作りに行く。

柗透がお礼の言葉を言っただけ笑んだとき、彼は座っているのだから、当然見上げる形になっていたが、そのまなざしに何故か既視感を覚えた。

それは彼がマシエリに来なくなる直前、幸せそうにしていたときと同じものな気がしたのだ。けれど同時にそれとは少し違う気もする。

不可解に思いながら、カウンターに戻るとまだ中村さんの姿が同じ場所にあった。

「中村さん？」

呼びかけると、ばちばちと彼女は瞬く。そしてゆっくりと口を開いた。

「雪ちゃん……私、裏に行ってもいい？」

「あ、はい……なるべく早く帰しますね、あのお客さん」

「あんまり急かしちゃ透君に悪いけど……まあ、でも、うん。遅くなりすぎてもいけないし……」

中村さんにしては珍しく、歯切れ悪く答える。私は深く追究せずに、分かりました、とだけ返し、エスプレッソマシンの前に立った。

暫く経ってエスプレッソが淹れ終わり、ホイップクリームをのせる。そしてそれをお盆にのせて、テーブルに運んだ。

「お待たせしました。エスプレッソ・コンパナです」

カチャリと僅かに音を立てながら、置く。保冷剤にタオルを巻いたものを頬に当てていた彼は、それを置いてカップの取っ手を掴んだ。そしてゆっくりと口に運んでいく。

「いてっ」

けれど口に含んだと同時に思わずという感じで、彼は顔を顰めた。恐らく口端だけではなく、口の中も切っているのだろう。

整った顔が眉を寄せるのを新鮮な気持ちで見つつ、私はどうしても気になって尋ねた。

「お客様、その頬は一体どうされたんですか……？」

私の問いに彼は何でもないように淡々と言った。

「恋人を振ったら殴られたんです」

「そう、なんですか……」

殴られた、という物騒な響きに驚きつつ、私はそう返す。一方で私の目に狂いはなかったのだと、自分に感心した。恋人がいることは、あのまなざしから何となく分かっていたのだ。

うん、と返しながら、柗透はカップを口元に運ぶ。元恋人

に殴られたというのに、目の前に座る彼はとても穏やかな表情を浮かべていた。

「長瀬さん」

「えっ」

「ん？」

苗字を呼ばれて、思わず大きな声を出してしまい、それに彼が不思議そうに首を傾げた。

「あの、私の苗字……」

「ああ、だって、ネームプレートに書いてあるじゃないですか」

そう言っただけで指をさしたのは、私の胸元に着いている『長瀬』と書かれたネームプレートだった。確かに書いてあったと確認しつつも、やはり驚きは消えなかった。常連客でも店員を名前で呼ぶのは近所のおじいさんぐらいだ。

「えっと、何でしょう……」

「まだ朝にここでバイトしていますか？」

ぱちぱちと瞬きをする。一瞬何を問われているのかわからなかった。

ここ数十分の間に驚きすぎだなど心の中で苦笑しつつ、私は頷いた。

「していますよ」

「そうですか」

彼が嬉しそうに笑う。どうしてそんなに嬉しそうにするのか、私は訳が分からなかった。

再び彼はエスプレッソ・コンパナを味わう。もう残り半分となった。

沈黙に耐えられなくて、思わず私は口を開いた。

「あの、どうしてこのお店に来なくなったんですか？」

「ああ、それはですね……」

彼はそう言いながら、言葉を探しているようだった。聞いてはいけないことだったかもしれない。私は彼が言葉を見つめる前に質問を撤回しようとしたが、先に彼が続けた。

「あのままだと自分が変わってしまったな、と思ったからです」

「えっと……」

「長瀬さんには理解できない感情、考えだと思えます、きっと」

彼はそう言っただけで口を閉じた。訳が分からず、私も口を閉じる。

何も私には分からなかったが、彼には彼なりの理由があった、お店に来なくなったのだろう、と勝手に自分の中で解決させるしかない。

エスプレッソ・コンパナがなくなり、カップの底が見える

ようになった。

「俺の名前、杳透って言うんです」

不意に彼が名乗る。真っ直ぐに私を見た。やはりとても綺麗な顔だと半ば見惚れつつ、はい、と答えた。

「俺の名前には驚かないんですね」

「ええ、まあ……」

「俺、一応モデルをやっているんです」

「知っていますよ。雑誌とかで見たことがあるので」

「そうなんです」

不思議な会話だと思った。世間話とは、ずれているような。

彼が何を話したいのか分からないまま返している。

けれど分からなくて当然だと思い直した。所詮私と杳透は

店員とお客の関係で、友人ですらないのだから。

「長瀬さん、下の名前は何なんですか？」

「雪、ですけど……」

聞いてくる意図が分からず、困惑する。

けれど彼は更に私を困惑させる言葉を放った。だから私はそれをお世辞として受け取ったのだ。

「雪さん。俺、あなたの顔が好きなんです」

「はあ、それはどうも」

4 衝撃

どれだけ服を着こんでも体の芯まで冷え込むほど、冬の早朝はとても気温が低い。だからマシエリの店内は暖房がよく効いていた。お店に入った瞬間に身を包む暖かさにふうと息を漏らす。控室で荷物を仕舞い、キッチンに向かった。

「あの、明人さん」

「どうしました？ 雪さん」

そこにいた明人さんに声をかけると、柔和な微笑みを携えながら聞き返された。

私は少し緊張を感じつつ、お願いをした。

「あの、来週の二十二日、月曜日なので私はシフトに入っているじゃないですか」

「はい、そうですね。休みを取りたいのですか？」

「いえ、そうではなく。その日、少しだけ外に出て、お店を写真に撮りたいんです」

懇願するように明人さんを見る。

来週の月曜日、つまり十二月二十二日は冬至の日だ。その日は特別で、日の出と日の入りの太陽光の差し込む角度が、一番このお店をきれいに照らす。去年私は偶然日の入りの瞬間のマシエリの姿を見つけ、そのきれいな姿に見惚れ、写真

に収めた。そのときのこと忘れられなくて、新しいバイト先を考えたときもここが真つ先に浮かんだのだ。

私のお願いは許されるだろうか、と明人さんの回答を待っている、彼は優しく笑った。

「勿論いいですよ。朝はそんなに忙しくありません。その代わりに、もし良かったら撮った写真の一枚をマシエリの宣伝に使わせてもらっていいですか？」

あっさり承諾され、ほっと胸を撫で下ろしたのも束の間、今度は明人さんの方からお願ひされた。他の人に見せるようなものでもないし、見せたくないものだから内心嫌だった。けれどシフトを一瞬でも抜け出して撮るのだから、それぐらいは我慢しなくてはいけません。

「勿論いいですよ」

「ありがとうございます。それじゃあ今日もよろしくお願ひします」

「はい」

明人さんはそう言って再びキッチンに戻っていった。

クリスマスが近くなるにつれ、明人さんは毎日お店に来るようになっていた。十個限定でオリジナルケーキを作ることになっているからだ。その予約はすでに埋まっており、お客さんの要望を聞きつつ、明人さんはデザインを完成させてい

た。今はその試作をしているらしい。

あの夜の日、柊透が再びこのお店に現れてから、彼は朝の常連客に戻った。

あの日は衝撃で身を固まらせていた中村さんだったが、その次の木曜日にシフトが被ったときに、彼の姿を見て大喜びをしていた。口紅が赤色ではなく、いつものコーラルピンクに戻っていたこともあって、とてもかわいかった。対して私はあまり心地良い気持ちにはなれなかった。

私がお世辞として受け取った言葉の後、彼は微笑みただけで特に何も言わず、エスプレッソ・コンパナを飲み干して帰っていった。訳が分からないとそのときは思っていたが、どうやら私の顔が好き、というのは事実のようだ。お店に来たとき、気付くとしつと見られていることが多くなった。

まあある意味お互い様だと考えて、私は気にしないようにすることにした。けれど枯渇していく心を完全に無視することはできていなかった。

十二月二十二日になった。少しわくわくした気持ちを抑えつつ、その時間になるまであくまで真面目に仕事をしていたが、やはり浮足立っていた。

こんなわくわくすることは久しぶりだった。何か明確な

目標を持って写真を撮ることはなかなかないから、新鮮な経験だ。それに、もしかしたらずっと枯渴したままの私の心を満たしてくれるかもしれない、とも考えていた。

「すみません、明人さん。行つてきてもいいですか？」

そろそろだと思い、明人さんに声をかける。明人さんは優しく微笑みながら、いいよ、と答えてくれた。お礼を述べつつ、控室から上着と一眼レフを取つてきて、一緒にシフトに入っている人に暫くホールをお願いして、私は外に出た。

今日は晴れで、空に雲一つない。少しずつ太陽が出てきているのか、空が少し白んできている。

今か今かと待ちつつ、試しにマシエリを数枚撮る。マシエリの外装は赤レンガ造りの壁に重厚感のある木製の扉、そして外から店内が見ることのできる大きな窓ガラス、という様相だ。デザイン的には他にもあるようなものだが、このお店がある位置に意味があった。マシエリは通りに並んでいるお店の一つであり、その正面は真北に向いている。そのため太陽が昇ると綺麗に横から太陽光が入る形で、照らされるのだ。大きな窓ガラスがその光を反射して、きらきらと輝くのも私にとって一つのポイントだった。

太陽が昇つてきて、光が伸びていく。一番きれいな瞬間を収めようとマシエリを斜めに写すように少し正面から外れた場所でカメラを構えたとき。

「あれ、長瀬さん？」

後ろから話しかけられて、私は振り向いた。そこには終透が立っている。寒さで少し鼻が赤くなっていた。

ああそう言えばもうすぐ彼が来る時間だったか、と思いついて、とりあえず挨拶する。

「おはようございます」

「おはようございます。長瀬さん、何しているの？」

カメラと私の顔を行ったり来たりしながら見る彼が、不思議そうに尋ねた。

「マシエリを撮ろうとしているんです」

「こんな早朝に？」

「はい。今日のこの時間しか無理なので……」

私は我慢できなくなつて、再びカメラを構えた。また少しずつ日光がマシエリにかかっていた。

すぐ左後ろに彼の気配があるのを感じながら、私はシャッターを切っていく。私の返答は充分ではなかったはずなのに、彼はずっと黙っていた。

静かに、シャッター音だけが響いている。不思議と通りには誰もいなかった。

マシエリの全体を太陽光が照らしたとき、ふと左後ろからスマホのシャッター音が聞こえた。

今この瞬間だ、と思いシャッターを押してから、私はカメラから顔を上げて振り返る。

「お客様も撮られたんですか？」

「うん。綺麗だなんて思ったので。長瀬さんはどうして撮っているんですか？」

「きれい、だからです」

自分と同じことを考えた人がいることに少し嬉しくなり、口角が上がる。それにさっきの一瞬で撮りたいものが撮れたから満足感があつた。

目の前の存在に、ちりちりと心が燻くすっていることは無視だ。

「ああそういえば」

何か思い出したように彼は言う、自分の鞆の中を漁り出した。何となく彼を置いて店の中に戻るのは気が引けて、探し物が見つかるまで待っていると、彼は手元に収まるほど小さな長方形の箱を取り出した。

「メリークリスマス、長瀬さん」

そして彼はそのまま箱を私に差し出した。表情は優しく微笑んでいる。

「えっと、これは……」

「口紅です。クリスマス当日にはイベントが入っていて来れないので、ちょっと早いですけどどうぞ」

「いえ、そういうことではなく……どうして私にクリスマスプレゼントなんて……」

なるべく何気ない言葉で返したつもりだが、内心は訳が分からず混乱していた。

私と彼には個人的な関係がないのに、客と店員でしかないのに。プレゼントを貰う所以も、まして口紅が贈られる所以ゆえんも、一切ない。

なのに、あまり知らない相手からプレゼントを差し出されていることに、不快感も嫌悪感も、なかった。

その理由に、私は何となく気付いていた。結局は目の前の存在に狂わされている、ということだ。息を吐き出したい気分になる。

そんな私の胸の内を知らない彼は箱を差し出したまま、目を緩ませる。

「あなたの顔が好きだからです」

「それは……」

「あなたに似合うと思うんです」
そうしてまた私の前に箱を差し出す。

受け取りたくなかった。彼がただのお客さんだからとか、モデルだからとかではない。彼が私の顔を好きだからという理由で渡そうとしているから。

私は私の顔が好きじゃない。

けれど同時にここで受け取りを拒否することで、彼の気分を害することに抵抗を感じていた。

それに彼は私にその口紅が似合うと言ってくれた。それは、もしかしたら違うかもしれないけれど、私が彼に対して思っていることと同じな気がした。

だから結局私はそれを受け取ることにしたのだ。

「ありがとうございます……」

「お返しはいらなから。俺の自己満足なので」

その言葉を聞いて、ああ自己満だつて分かっているんだな、と心のどこかで安心した。

「ただ、一回だけでいいので、使った姿を見たいです」

前言撤回、安心なんてできるものではなかった。

その日、家に帰ってから、私は洗面台の前に立った。

目の前に自分が映っているが、それをあまり見ないようには手元の箱を見た。

金色に光るそれはあまり目にしないものだ。どこかのブランドのものだろう。中身を出すと、これまた金色に光るケースが出てきた。

今まで私は口紅を使ったことがなかった。そもそも化粧を

したことがない。化粧をすることで自分が嫌な存在に近づいてしまいう気がして。

だからこの口紅が私にとつての初めての化粧だ。

キャップを外すと私が予想していた色とは全く違うものが出てきた。黒だ。光を受けてラメが少しきらきらとしているが、確かにそれは真つ黒だった。

この黒色が私に似合うというのか。稜透の感覚が分からない。

とはいえ貰ったものなのだから、とりあえず着けてみようと思い、口紅の斜めになっている部分を下唇にのせる。そしてそのまま横に引いた。そのまま上唇にものせる。

鏡を見ると、黒髪を顎のラインで切りそろえ、真つ黒な唇をした自分が映っていた。私は自分の顔が嫌いだ、それを差引いても到底この黒色が自分に似合っているとは思えなかった。

が、少し経ってその黒色が消えていった。その様子に呆気に取られている間に、どんだん色は変わっていき、そして最終的に真つ赤な色に変わった。

ふと鏡の中の自分と目が合った。黒髪、整った目鼻立ち、ふつくらとした唇、そしてその色は真つ赤。

母と、目が合った。

——ガッ

「はあっ……はあっ……」

カランコロンと軽く響く音と荒い息遣いだけが私の耳元に届いてはつとする。

自分が何をしたのか、分らず頭の中は混乱した。けれど言い表すことができないほどの嫌悪感が胸の内に渦巻いている。

気付くと私は俯いていて、洗面器にケースと折れた口紅が転がっていた。

「あ」

人から貰ったものを壊してしまった、と罪悪感を覚える。

けれどケースに残った口紅をもう一度使う気にならなかった。

顔を上げると、鏡の真ん中に丁度私の唇を隠すように黒い跡がついていた。

5 充足

クリスマスの日、椋透は彼自身が言っていた通りお店に来なかった。ちなみに木曜日であるため中村さんも通常であれ

ば入るシフトだが、別の人と変わっていた。彼女も彼が出演するというイベントに行っているのだろうか。

クリスマスだからといって私にとつては何も特別なことはなく、バイトを終えてすぐ家に帰った。大学もないからとも暇だが、外は寒いから出かける気にもならない。

家で暖かくしていようと暖房をつけて、ネットで次の日曜にどこに写真を撮りに行くか検討する。するとインターホンが鳴った。

「はい」

「荷物を届けに来ましたー」

インターホンのモニター機能で映像を確認し、宅配業者の姿を確認して、扉を開けた。

「長瀬雪さん？」

「はい」

「じゃあここに受取サインをお願いします」

言われるがままサインを書いて、大きなダンボール箱を受け取った。到底それは抱えられるものではなかったから、引きずって部屋まで運ぶ。

送り主を見ると、そこには母の名前が書いてあった。

嫌な予感がある。

ガムテープを剥がして蓋を開ける。すると私の嫌な予感

の中していた。

そこには実家にあつた私の私物や、父の遺品が入っていたのだ。それらの上に一枚手紙が置いてあつた。

二つ折りになっているそれを開く。

『雪へ』

家売ることにしました。さしあたってあの家に置いてあつたあなたのものと、お父さんの私物を勝手ながら送らせてもらいました。お父さんの私物はあなたの好きにしてください。ただ服だけはあなたもいらないうと判断し、売ってそのお金をあなたの口座に振り込んでいます。確認しておいてください』

ああやっぱり、と思つて溜息が出た。私は賭けに負けたのだ。

手紙に二枚目があることに気づき、続きを読む。

『夏にあなたが言ったこと、一つだけ訂正させていただきます。私はお父さんを捨ててなどいません。あなたにはそう見えるかもしれませんが、むしろこれはあの人の望みでもあります。私の人生にあの人がいなくなつても彩りがあるように、と。』

あなたには随分嫌われるような態度を取っていたことは重々承知の上ですが、私は私なりにあなたのことを大切に想っています。困ったときは私に連絡をください。

母より』

くしゃり、と手元で音がした。

どこまでも身勝手な母親だと思つた。そして彼女の言葉に信じるならば、父親も随分身勝手だったらしい。私の人生に彩りがあるように願うことはなかつたのだろうか。

はあ、と息を吐く。徐に自分のスマートフォンを出して、LINEを開く。そう苦勞せず母親のアイコンを見つけた。それを長押しして、ブロックボタンを押す。そしてそのままブロックリストを開くと、編集という項目を押した。

すると削除、という文字が出てくる。私は躊躇ためらいもなくその文字を押した。

クリスマス後初めての土曜日ということで、何となくカッブルのお客さんが多い気がした。

次々と運ばれてくる皿が忙いそしさを表していて、洗いが溜まらないように暇を見ては常に皿洗いをしている、そんな日だった。

チリン、と音が鳴って、私は一瞬扉の方を見た。ホールには中村さんが常にいるはずだから、対応に問題はないはずだが、一応の確認だった。けれど一度戻りかけた顔の向きを再び扉に向けることになった。そこには柘透がいたのだ。

前回土曜日に来たときは変装も何もしていなかったが、今回は帽子を目深に被って、マスクをしていた。

とはいえ至近距離で見た中村さんはすぐ気付いたようだった。頬が赤くなっているのが遠目でも分かるぐらいだ。

とはいえ、接客を忘れるような人ではない。今度こそ食器洗いに戻ろうとしたとき、彼と目が合った。すると一度視線が逸れ、中村さんと話し出した彼は、その途中私を指差した。

えっ何、と戦々恐々としていっていると、困惑した表情を浮かべた彼女が私の所にやってきた。

「雪ちゃん……透君をいつもの席に案内してもらえるかな？」
その言葉に私も困惑する。とにかく案内しないといけないため、簡単にそれに答えて、私は柘透の所へと向かった。

「こんばんは」
「こんばんは」

「どうぞ、奥へ」
挨拶を交わして彼を案内する。丁度彼がいつも座る席は空

席だった。

席に向かいながら彼は小声で言った。

「口紅、気に入らなかったですか？」

まさかこんな所で聞かれると思っていなくて、動揺したが、気持ち落ち着かせながら答えた。

「いえ……あの、実は家に帰る途中で失くしてしまっ……」
「そうですか。それは残念ですね」

「すみません……」

嘘を吐いているという事実と、壊してしまった罪悪感から謝ると、彼は頭を振った。

「あの口紅を着けた長瀬さんが見れなかったのが残念なだけなので、気にしないでください」

気を遣^かっている訳ではなく、本当にそう思っているように見えて、少しほっとする。けれど罪悪感が消えることはなかった。

席に着いた彼はメニューをさっと見た後、カルボナーラとやはりエスプレッソ・コンパナを頼んだ。

キッチンにカルボナーラの注文を伝えて、カウンターの方に行くと、中村さんがレジの方から近付いてきた。

「雪ちゃん」
「どうしました？」

「えっと……大丈夫だった？」

少し迷う様子を見せた後、中村さんがそんな風に聞いてきた。

「ええ、まあ……」

私も何と答えたらいいか分からなくて、言葉を探す。すると彼女が苦笑した。

「店員を指名するなんてこと初めてだったから……何かトラブルでもあったのかなって心配になっちゃった」

「本当に大丈夫ですよ。ただ席に案内しただけです」

「そっか。でもそれじゃあ……」

中村さんが言葉が続けようとしたが、再び来店の合図の音がそれを遮った。すぐに彼女は扉の方へと向かう。

まだ洗うべき食器が残っていることを確認した私は、再び食器洗いを開始した。

暫く黙々とスポンジでこすっていると、再び中村さんから声をかけられた。

「雪ちゃん、ごめんね。また透君に呼ばれてるんだけど……」

「え？」

呼ばれてるとは何？ と思ったが、とりあえず行くこうと、タオルで濡れた手を拭いていると、まだ私の隣に立っている彼女が、再び口を開いた。

「雪ちゃん、もしかして透君と親しい関係だったりする……」

……？」

恐る恐るといった感じで聞かれた質問は、私を困惑させた。まさか彼女は私と終透の間に個人的な関係があると思ってるだろうか。

「そんなわけないじゃないですか」

「本当？ 実はね、最近透君に恋人が新しくできたんじゃないかって噂なの」

「まさかその恋人が私だって言いたいんですか？」

そのように勘違いされていることに驚いて、目を開く。私の問いかけに彼女は遠慮がちに頷いた。

「うん……ほら、前に一回閉店ぎりぎりに来たときがあったじゃない？ あの頃に五年ぐらい付き合ってた彼女と別れたんじゃないかって噂が流れてたんだけど」

「それは事実ですよ。あの日に彼自身が言っていました」

「やっぱり、そうだよね」

納得するように頷く。私がああ夜終透と話した内容は彼女に言ったことがない。それでもあの腫れた頬から恋人と別れたことを連想しても可笑しくないだろう。恐らくこれは彼女にとつての再確認だ。

「でも、それと私を終透の恋人だと勘違いすることに関係あるんですか？」

「私、火曜と金曜の朝にもシフトに入ってるじゃない？ それでね、てつきり透君は毎日お店に来てるものだと思うたの」

「違うんですか？」

「多分雪ちゃんから聞いたことも考えると、雪ちゃんが朝のシフトに入ってる、月曜と木曜にしか今は来てないと思う」

その事実には私は驚いた。てつきり平日の朝には毎日来ているものだと思うていたのだ。だから近所のおじいさんに常連客として認定されるのもそれなりに早かったのだと、考えていた。

一方で柗透の行動には一切納得も、理解もできなかったが。

「それに最近凄く雪ちゃんのことを見ている気がするし……本当に何も関係ない？」

「……勿論です。中村さんと変わらない、ただのお客さんと店員でしかありません」

私はそう言いつつも、心の中では少し自信がなかった。

柗透は私の顔が好きだと言って、口紅を贈った。これは本当に何も関係がない、と言えるのだろうか。

でも本当に私と彼には何も関係がないのだ。

私の返答に彼女は、そっか、と呟いた。けれどどこか不安げで、まだこれでも疑惑は払拭できていないのだろう。だか

ら私は正直に、けれど安心させるように彼女に伝えることにした。

「中村さん。私は柗透という人のこと、本当に何とも思っていないですよ。ある意味では、中村さんに悪いですが」

「ファンでもないってこと？」

「はい」

彼女の言葉にはつきりと頷く。すると少し残念そうに笑った。

「雪ちゃんの言葉、信じるよ。ファンにならなかったのは、少し寂しいけど」

「ごめんさい」

「ううん。こっちこそごめんね。引き留めちゃったし……透君の所に行ってもらったいいかな？」

私は頷き、彼の席へと向かった。彼は丁度パスタをフォークに巻き、口に運んでいる所だった。

「お客様、何か御用ですか？」

私がそう問いかけると、彼は顔を上げて、私を見上げた。そのとき、あつと気付いた。ペろりと舌が舐めた彼の唇の色に。それは食事で若干取れかけていたが、私が彼に対して

欲しいと思っていたアプリコットだった。

「……きれい」

ほとんど音が出ていなかったが、思わず私は零す。同時に動悸が少しだけ早くなった。

私の声に気付いたのか、気付いていないのか、彼は微笑んだ。

「あなたに話したいことと……渡したいものがあつて」

「今、ですか……?」

「今です。あなたの帰りを待っていたら、俺のファンであるあなたの同僚に見られてしまいますから」

そう言われて私は思わず中村さんのいる方向を見た。彼女はお客さんの対応をしていて、こちらを見ている様子はない。

「気付いていたんですね……」

「見ていたら分かります……まずこれを」

彼は鞆から何かを取り出した。それはやはり口紅だった。

けれどクリスマスプレゼントで貰った金色のケースではなく、銀色の、少し装飾の入ったものだった。

私はこれに見覚えがあつた。

「これは……」

「俺の予備の口紅なんですけど、まだ使っていないですし、これもあなたに似合うと思うので。また今度違うものを渡しますね」

彼の言葉を半ば聞き流し、誘われるがまま、私はその口紅

を手に取った。自分の心臓の音が徐々に大きくなっていく。キヤップを外して中身を見ると、そこには真新しいアプリコット色の口紅の芯があつた。

一つ、どくりと大きく鼓動が打った。

「話したいことは……」

「俺、あなたが好きなんです」

聞こえてきた言葉に思わずえっ? と声が出る。彼は今までの私の顔が好きだと言ってきた。けれど、私が好きというのはまるで違ってくる。

私はぐっと震えそうになる体に入れて、彼を見る。彼はざつと黙って、私を見つめている。

さらりとした黒髪、手入れの行き届いた眉毛。

そうして視線を下に動かしていくと、彼と目が合った。

その瞬間、私は気付いた。彼がどんな感情を持って私を見ているのか。

それは今まで向けられたことも、見たこともないものだった。だが同時によく知っているものだ。

きつと他の誰にも理解できない。でも私なら、そして彼なら理解できる。この狂った感情を。

だから私はその感情に従って、手元にある口紅のケースを再び開けた。これは私に似合うと言われ貰ったものだが、私

は一生着けるつもりがなかった。

何故ならこの口紅が彼を完璧なものにしてくれるから。この色は彼だけのものだ。

くるりと回してアプリコットの色を出したら、私は早まる鼓動につられるまま、テーブルに左手をついてぐっと身を屈めた。

今この瞬間に私と彼しかこの世界にいない気がした。いや、もつと言うなら彼しか、この世界には存在していない。

私にとつてきれいなものが目の前にある。最高にきれいで、うつくしくて、完璧な顔。

手の震えを抑えながら、その唇にゆっくりと口紅を置いた。そしてゆっくりと横に引いていく。

以前貰った黒い口紅のように色が変化するものでもないのに、唇に色が着く度に一段と輝いて見えた。

時間をかけてゆっくりと、下唇、上唇と塗っていく。

そうして完成したとき、私はゆっくりと身を引いた。けれど口角が上がるのを止められない。

そのまま口を開いた。

「私もあなたの顔が好きです」

歓喜の隠せない私の言葉に、柘透はそのアプリコット色の唇でにとつと笑みを作った。

「俺と友達になってください」

「喜んで、柘さん」